

# 立体音響を用いたラジオドラマ制作

福岡国際大学  
国際コミュニケーション学部  
デジタルメディア学科

城崎研人

# 目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 立体音響を用いたラジオドラマ制作（浦島太郎／シンデレラ） .....	2
2.1 なぜ立体音響を用いたラジオドラマ制作なのか.....	2
2.1.1 ホロフォニクスとは.....	2
2.1.2 バイノーラルとは.....	3
2.2 ラジオドラマ制作手順の確認.....	4
2.2.1 浦島太郎とシンデレラ.....	4
2.2.2 制作手順.....	4
2.2.3 学園祭での評判.....	6
2.3 ラジオドラマに必要な技術と知識および機器.....	6
2.3.1 必要な技術と知識.....	6
2.3.2 必要な機器.....	9
第3章 立体音響作品「勘弁してください大佐殿」.....	10
3.1 技術的な改良点.....	10
3.2 ストーリーの解説.....	10
3.3 制作状況.....	11
第4章 まとめ.....	12
参考文献.....	13
謝辞.....	14
付録.....	15

# 第1章

## はじめに

近年、一般家庭への DVD の普及やレンタルの容易化によって、「5. 1チャンネルサラウンドスピーカー」を用いたいわゆるホームシアター・システムが注目されている。これは6つのスピーカーで聴取者を囲み、音が立体的に聞こえるように作られた音響システムである。このシステムによって、テレビなどのようなステレオ出力よりも立体的な音を再現できるため、以前は映画館などの限られた場所でしか楽しむことのできなかった立体音響を、家庭でも楽しむことができるようになった。

しかしながら、立体的な音を体感できる代償として聴取者は高額な機材を購入しなければならない。このため「凄い臨場感」と「良音」を謳われつつも、あまり普及していないのが現状である。

立体音響には、この5. 1チャンネルを使うものとは別に、「バイノーラル(\*1)」や「ホロフォニクス(\*2)」と呼ばれる立体音響手法が存在する。これらの立体音響は、ステレオヘッドホンつまり2チャンネルのスピーカーのみで立体音を体感することが可能である。

立体音響の中でもホロフォニクスに関しては、モノラルでもある程度の立体音響を体感することができる上、サラウンドシステムでも困難な上下の音の移動の体感も可能になっている。

このように高額なサラウンドシステムを使用するのではなく、どの家庭にも転がっているヘッドホンやイヤホンで手軽に立体音響が楽しめることができるということは、映画館や家のリビングなどの特定の場所以外、例えば通勤や通学などで立体音響を使ったエンターテイメントを楽しむことができるということである。

このことは、エンターテイメント・コンテンツのポータブル化という時代の流れに沿ったものであり、より一層の進化にかかわると考える。

## 第2章

### 立体音響を用いたラジオドラマ制作

(浦島太郎／シンデレラ)

#### 2.1 なぜ立体音響を用いたラジオドラマ制作なのか

研究テーマを模索していた当初は、クレイアニメーションの制作を中村祐樹氏と計画していた。エンターテイメントとしてのクレイアニメーションは、1期生、2期生の先輩方が制作されていたこともあり、身近なものだった。しかし、クレイで作られたキャラクターから映像を作り出す作業は、とても緻密で手間がかかり、また、先輩たちの挑戦のような「効率のよい制作方法の模索」のような新たなアプローチ方法が見つからなかった。

そのような中、私は平川ゼミでやられていない新しいエンターテイメントへの挑戦として「観て楽しむもの」ではなく、「耳のみで楽しむもの」を作ってみたいと考えるようになった。調べていくうち「立体音響」という技術があるということを知り、興味を持った。

立体音響の作品は、インターネットの動画配信サイトによく投稿されている。そこで私は投稿されているもの全ての作品を視聴した。この結果、これらの立体音響は、例えば「マッチ箱を揺すりながら右から左へ動かしてみた」とか、「紙袋を上から被せた場合」などのように、それ単体の立体音響で、ストーリー性のある作品はなかった。このため、ストーリー性のある立体音響作品を制作してみるの面白いのではないか、という結論に達した。

##### 2.1.1 ホロフォニクスとは

ホロフォニクス技術を用いた立体音響は、スピーカーが2チャンネルにも関わらず、左右間における音の移動が鮮明に確認でき、さらに上下の音も実際に耳で聞く音のようにリアルに聞こえるものである。私は、立体音響ドラマを制作する上で、ぜひこの技術を採用したいと思った。

以下にホロフォニクスの要点を述べる。

- 1：耳が出している参照音と、外界の音の干渉を脳が読取ることによって、位置情報を得ているという理論。
- 2：実際には、合成した参照音とともに外界の音を録音するし、それらを使って立体音響データを作る。
- 3：再生時、脳は自らの参照音波を出し、情報を解読し、録音された周囲の状態を脳内で再現する。

しかし、このホロフォニクス発明者であるヒューゴ・ズッカレリ氏は上記3点の記述と、ダミーヘッドを用いていること以外の情報を秘匿しており、制作時における様々な問題点の解決ができなかったため、この方法を使うことができなかった。

### 2.1.2 バイノーラルとは

バイノーラル録音は、ダミーヘッドと高指向性のコンデンサマイクを用いて収録を行う。この収録方法は比較的簡単で、人間の鼓膜がある位置にマイクをセットし、バランスを右と左に振り分けるだけで音の移動を確認することができる。

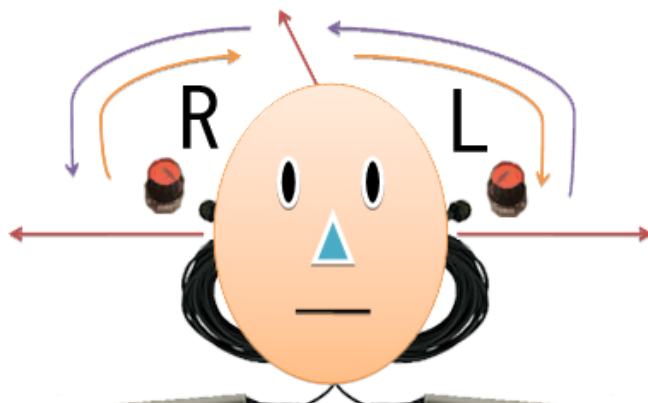


図 2.1 バイノーラル録音の方法

このバイノーラル録音は、ホロフォニクスと比較して、「左右間の音の移動が劣る」、「上下の音が再現できない」などのデメリットがあるが、ラジオドラマでは左右間の音の移動を多く使いたかったため、問題はなかった。

## 2.2 ラジオドラマ制作手順の確認

立体音響を使った作品の制作は、授業などでは一度も行われていない。そのため、どのような作業になるのか、どのような技術や知識が必要になるのかわからない。そこで、まずは簡単な作品を作ってそれらの確認を行うことにした。また、立体音響作品がエンターテイメントとして成り立つかどうか、大学の学園祭に出店することで確認することにした。

### 2.2.1 浦島太郎とシンデレラ

まず、学園祭において適したジャンルの作品を作らなければならない。聞いていて「楽しいもの」は必然であるが、学園祭でお化け屋敷が人気を博していることを考え、「怖いもの」もエンターテイメントとして考えられる。そこで、ラジオドラマの検証としては、複数の作品の感想を得た方が今後の作品へ良い情報を得られると考え、私が「コメディ」、中村氏が「ホラー」を担当することで作業を開始した。

### 2.2.2 制作手順

以下に浦島太郎およびシンデレラの制作手順を示す。

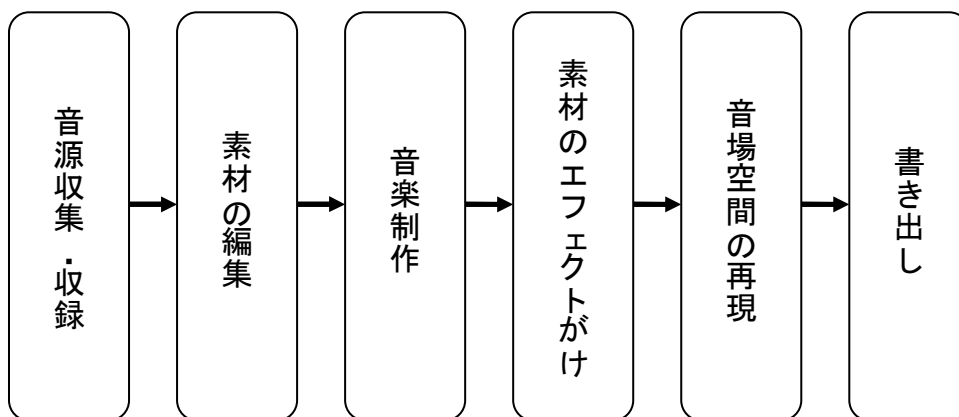


図 2.2 制作の流れ

## 1. 音源収集・収録

を中心に素材を使ってメディアスタジオ内でサンプリングを行った。用いた素材は、紙コップで馬の走る音や、スリッパで歩く音などがある。この作業と同時進行で、ドラマ収録も開始した。オーディオミキサーにバイノーラル録音の設定を与えているため、一度に収録したほうが、効率が良い。

## 2. 素材の編集

素材の編集においても中村氏が主に作業を担当した。収録し終えた効果音の余分な音、空白をカットしていく作業である。

## 3. 音楽制作

音楽制作では、卒業制作で作曲を行っている北川祐子氏に協力を依頼し、シンデレラにおいては音楽3点を提供してもらった。浦島太郎では私と中村氏で作曲をしたものと著作権フリーの音楽を用いた。

## 4. 素材のエフェクトがけ

素材のエフェクトがけからは私が中心での作業となる。ホラーとコメディの要素を加えるためのエフェクトをかけ、必要に応じてピッチの変更なども行う。また、周波数ごとの変更を行うことで音を変えていく。出来上がった効果音を実際の音と聞き比べて微調整を行う。

## 5. 音場空間の再現

音場空間の再現では、GarageBandのトラックパンを主に用いた。収録の時点で、音源はある程度の音場情報を持つてはいるが完全ではない。このためトラックパンを用いて、動かしたい音の方向を強調する。そうすることで微弱で捉えにくかった音の移動がはっきりし、聴取者に音の位置を伝えることが出来る。

## 6. 書き出し

書き出しは中村氏が担当した。立体音響の書き出しは音声のみを書き出すため、レンダリング時間と容量はさほどかからない。今回はプレイヤーなどで持ち運び出来るよう「.wav」、「.mp3」の拡張子を作成した。

また、それぞれの作品における協力者は表 2.1 の通りである。

表 2.1 浦島太郎およびシンデレラの担当表

作業内容		作業担当
ストーリー制作	シンデレラ	城崎
	浦島太郎	中村
音源素材の収集・編集・データ管理		中村
収録・演技指導		城崎・中村
声の出演		亀田裕也 氏、北川祐子 氏、草野安耶 氏、 城崎研人、高木遥司 氏、玉城寿乃 氏、 松尾沙知 氏、皆木一將 氏
音楽制作		北川祐子 氏
音場再現・素材のエフェクトがけ		城崎
本編制作・雑音除去		城崎・中村

### 2.2.3 学園祭での評判

学園祭では、ブースに暗幕を張りその中にヘッドホンを4つセットした。2日間で106人の聴取者を得ることができ、聞き終えた聴取者にもれなく感想を聞いていった。そこで賛否両論意見を戴いた。ジャンルとしては学園祭に合っていて面白いなど上々の結果を貰ったが、「音量にムラがある」、「声が聞き分けづらい」「雑音が目立った」という悪かった点多々戴いた。

#### ◆ 学園祭を通しての反省点

反省点として、「雑音が目立った」ことが最大の原因ではと私達は考え、検討した。話し合いの結果、この雑音を除去することで品質が改善され聴取者が聞き取りやすくなるのではという結論に達し、BIAS 社開発の SoundSoap というノイズ除去アプリケーションの購入を行った。

## 2.3 ラジオドラマに必要な技術と知識および機器

### 2.3.1 必要な技術と知識

立体音響ラジオドラマを制作する上で必要な技術と知識は次の通りである。



#### ◆ ストーリー・脚本制作に関する知識

ストーリー・脚本制作では、「起承転結」を明白にし、誰が聞いても解かりやすいよう作ることが良い作品を生むために必要であると思う。また、あらかじめ聴取者の年齢層など、ターゲットを絞って構成を立てていく事で、脚本をまとめ易くなる。ラジオドラマは、当然ながら音だけのものであるため、視覚で説明できない個所を聞いている人が想像できるように音で説明をしなければならない。これらのことを考えながらストーリー展開や脚本を書いていくことが必要になる。この作業が不得意な場合は、それらが得意な人へ頼む方がよい作品になる。

#### ◆ 音の構造に関する知識

音をただ聞くのだけでなく、音を目で見る（波形としてとらえる）ことが重要である。音源をデジタルデータとしてモニターに反映させ、波形や周波数を目で確かめ、操作する事で、同じ音でも違った音に聞こえるように変形させることができる。また、微弱な音の聞き逃しを避けるために、一定以上の性能を備えたヘッドホンを使用する方がよい。例として下記に私が使用したヘッドホンのスペックを紹介する。

表 2.2 ヘッドホンのスペック (Panasonic RP-HTX7)

型式	RP-HTX7	
装着方式	オーバーヘッド	
構造	密閉型	
再生周波数帯域	7Hz～22kHz	
インピーダンス	40Ω	
音圧感度	99db	
ドライバ口径	40mm	
プラグ	標準/ミニプラグ 24k 金メッキ	
コード長	1.2m	
重量	153g	

また、このヘッドホンとは別に性能の低いイヤホンを使い聞き比べを行っていくことで、ヘッドホンやイヤホンの性能にかかわらず聴取者が立体音を体感することが出来るか確認をとるようにする。

#### ◆ スタジオ機材の知識

ラジオドラマの録音は、大学のスタジオで行った。コンピュータのマイクなどでも録音は可能だが、録音品質を考えればスタジオで行う方が良い。本学内のメディアスタジオには、オーディオミキサーをはじめ、スイッチャー、テロップャーなど、自学せねば操作方法のわからない機材が多々設置してある。これらの機材を使いこなすには、メディアスタジオの配線や、機材同士の相互関係など、スタジオ全体の構造から知る必要がある。誤った使い方をしては、機材の性能を発揮することはおろか、故障する可能性がある。

#### ◆ iMovie の知識

本学では iMovie がメディアスタジオと連携しており、収録の時点でデジタルデータとして取り込めるよう配線が組まれている。この設備は、音声の劣化が殆どなく収録できるため、時間の短縮に繋がる。

#### ◆ GarageBand（エフェクト）の知識

GarageBand 自体は、音を編集するアプリケーションだが、音にエフェクトをかけ、それらを組み合わせることで立体音響の作品に仕上げることが可能である。GarageBand に備わっているエフェクトの数はおよそ 30 種類ある。その一つひとつの中にも細かい設定があり、全て手作業で確かめていかねばならない。根気の要する作業ではあるが、全てのエフェクトを理解すれば質の良い作品になる。

#### ◆ SoundSoap の知識

録音時、必ず雑音が入ってくる。それらを除去しなければならないが、知っておかなければならないのが、雑音の種類である。以下に雑音の種類を表を示すが、一例を見ても分かるように、ノイズの種類は複数あり、そのノイズに対応した除去を行っていかねばならない。

雑音に関する一番の問題は、「雑音は完全に除去することが出来ない」という点である。雑音も「音」であるため、除去を過度に行うと必要な音や声まで削ってしまうことになる。このため知っておくべき点は、どの程度除去すれば人間にとって雑音が不快に聞こえなくなるのか、ということである。

表 2.3 ノイズの種類

種類	説明
ヒスノイズ	サーという音で、テープ収録の際よく耳にする
ハムノイズ	ブーという電源からの混入による雑音
プチノイズ	デジタルクリップやパソコンの処理不足から混入

### 2.3.2 必要な機器

制作に使用した機器は、以下の通りである。

表 2.5 使用した機器

名称	メーカー	備考
オーディオミキサー	SONY	メディアスタジオ備品
コンデンサマイク (ピン)	SONY	高指向性二本使用
iMovie	Apple	収録・サンプリング
カハマルカの瞳	Mil Besos	サンプリング
GarageBand	Apple	本編の編集
SoundSoap2	BIAS	ノイズキャンセリングソフト
RP-HTX7	Panasonic	2チャンネル型ヘッドホン
ATH-CKM-50	audiotechnica	2チャンネル型インナーイヤーヘッドホン
イヤホン	No brand	低品質のイヤホン

上記にも説明したとおり、異なる条件のヘッドホン、イヤホンを使って比較する事で、どの程度の違いがでるか検証が行える。

## 第3章

### 立体音響作品「勘弁してください大佐殿」

#### 3.1 技術的な改良点

「勘弁してください大佐殿」は、学園祭で公開した浦島太郎およびシンデレラの反省点を踏まえて作成した。とくに力を入れた点は上記でも説明した雑音の除去である。細かなノイズを手作業で除去することを必要としたが、音質は上がったと思われる。

次に音楽制作である。学園祭では音楽を作曲、提供してもらったが「勘弁してください大佐殿」では、提供されたものより上手くはないが、自分で考えた通りの音楽が作れるという理由から自主制作をしようと考えた。

#### 3.2 ストーリーの解説

まず、作品の主なターゲットは、通学、通勤に「電車」を利用する人たちである。電車通勤、通学者の平均乗車時間は30分～60分で、その間音楽を聴いている人もいれば、ただ辺りの広告を見ながら立っているだけという人もいる。いずれも10分足らずで飽きてしまうものばかりである。そこで約25分～30分のラジオドラマを制作し、退屈な電車内を満喫してもらおうと考えた。

ただ、立体音響は音場情報を操作しているため、歩きながらや、自転車、自動車を運転しながらの体感は大変危険となるため、これらは聴取者への禁止事項としたい。

#### <あらすじ>

大佐のコンピュータメンテナンスをするため、大佐の部屋を訪れた「城」と「中」。しかしここで思わぬミスをしてしまう。大佐の逆鱗に触れた二人は戦闘知識もないまま軍隊として火星へ飛ばされてしまう。そこで前任中の兵士や小隊長に出会うが、理由も解からぬままエイリアンとの戦争が始まってしまう。果たして二人は無事地球へ戻ってこられるか。

### 3.3 制作状況

収録の際、録音は順調に進んでいたが、メディアスタジオ内の空調が切っているにもかかわらず15分毎に稼動し、収録が中断することが多々あった。この空調の音が雑音としてマイクに拾われてしまうため、稼動していないときに収録せねばならない。このため収録中に空調が稼動していないか、常に気を配っての収録となった。

作業の効率化に最も役立ったのが、「GarageBand」と「Fantom Xa」（キーボード）の連携である。Fantom Xaのドライバをコンピュータにインストールしたことで、これら2つの連携がとれ、作曲、効果音作成に大いに役立った。

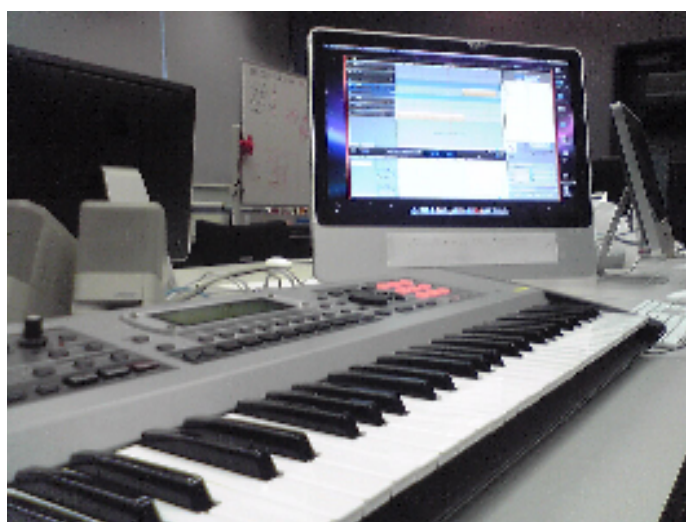


図 3.1 GarageBand と Fantom Xa

また、「GarageBand」と「SounSoap」も連携することが出来た。これによって編集と雑音除去を同時に行え、時間の短縮と作業の効率化を図ることが出来た。



図 3.2 GarageBand と SoundSoap

## 第4章

### まとめ

立体音響を用いたラジオドラマ制作を通して、一つひとつの作業の苦勞を知った。ストーリーを考えるだけで連日連夜悩まされ、面白くなければまた一から考え直すと時間を費やした。また、私の役割は技術的な面が多く、何から始めればいいのかわからず、収録時にオーディオミキサーのLRバランスをとり忘れるなどの失敗を繰り返した。この他にも、編集時に強制終了せざるを得なくなった際、保存をしていなかったりバックアップをとっていなかったりと、作業を振り出しに戻してしまうようなこともあった。雑音除去においても、ノイズを消しすぎて声の一部も削がれてしまい音質の劣化を引き起こすこともあった。

これらの問題にあい、それに対処をしながら、次第に計画性を持った行動をとろうと心がけるようになったのが、一番の成果だと思う。最終的には、強制終了時に作業を戻されることも少なくなり、作業が潤滑に進むようになった。

しかし、日にちごとのスケジュールを立てていなかったことで作業時間に偏りができ、時間配分がうまくいかないという問題が最後まで残った。始めた当初から綿密にスケジュールを立てていれば、作業が遅れることはなく、次の作品ができたはずである。「勘弁してください大佐殿」が第1話だけで終わったのは、今回の卒業制作において一番の反省点である。

最後に、今回完成した作品を視聴して、改めて周囲の協力があって成り立っていることを実感した。これらの経験を今後を活かせればと考える。

## 参考文献

- \* 1 <http://bbsitake.hp.infoseek.co.jp/binaural.htm>
- \* 2 <http://www.23net.tv/xfsection+article.articleid+69.htm>

## 謝辞

本卒業制作を行うにあたり、福岡国際大学国際コミュニケーション学部デジタルメディア学科の平川幹和子准教授には、就職活動および卒業制作「立体音響を用いたラジオドラマ制作」のご指導、ご鞭撻を賜り、感謝にたえません。

また、卒業制作「立体音響を用いたラジオドラマ制作」にご協力いただきました、伊東賢宏氏、牛嶋亮太氏、大庭康弘氏、亀田裕也氏、北川祐子氏、木下頌人氏、草野安耶氏、小宮裕幸氏、高木遥司氏、玉城寿乃氏、西田一也氏、原武彦氏、松尾沙知氏、皆木一將氏、デジタルメディア学科の皆様には、改めて、深く御礼申し上げます。



## 付録

題名	シンデレラ			
脚本	城崎研人			
キャスト	シンデレラ	皆木一將	継母	北川祐子
	アナスタシア	玉城寿乃	ドリゼラ	松尾沙知
	魔法使い	城崎研人	王様	城崎研人
	王子	城崎研人	王宮使い	高木遥司
	ナレーション	亀田裕也		

### <あらすじ>

遠い昔、シンデレラという子がいた。両親に先立たれ継母に引き取られたシンデレラは、継母と義理の姉二人に苛められ日々を送っていた。そんなある日のこと、国王から舞踏会の招待を受ける。継母は実娘二人を王子と結ぼうと義娘連れ、義娘のシンデレラを置いて舞踏会へ行ってしまった。

夜になり舞踏会が初めっている時間、自室でシンデレラが落ち込んでいると、いきなり目の前に魔法使いが現れる。その魔法使いが魔法をかけるとシンデレラが着ていたボロボロの服が綺麗な服になり、汚い靴はガラスの靴へと変わり、魔法使いから王宮へ連れていってもらおう。このとき、魔法使いから1つだけ制約を交わされる。それは12時になったら服を返してくれとのことだった。この服は魔法使いの妻の物らしく、早く返さないと怒られてしまうらしい。

宮殿に着いたシンデレラは、王子に声をかけられ一緒に踊ることになる。しばらく踊っていると時計台から12時を示す金が鳴り始める。慌てて舞踏会から飛び出したシンデレラは、ジェット機をチャーターしていた魔法使いに乗せてもらいその場を逃げ切る。この時、ガラスの靴を片方落としてしまった。

明け方、目を覚ました場所は自室のベッドだった。昨日の出来事は夢だったのかと落ち込んでいると、部屋の外が騒々しい。何事かと隠れてみると、王宮からの使いがガラスの靴を持ってやってきていた。靴が合わない義姉の二人を見て、諦めて帰ろうとしていた王宮の使いが隠れていたシンデレラを発見する。王宮の使いは早速靴を履かせてみた。

入らない。シンデレラが力を入れるとガラスの靴はあっけなく砕けてしまう。シンデレラは王宮の使いに、靴は入ったのだとドスのきいた声で強要し始める。王宮の使いが困惑していると王子が顔を出す。王子がシンデレラの声の聞こえを聞くとすぐにわかったらしく、シンデレラを王宮に迎え入れることにした。

この時シンデレラは義母と義姉を召使として王宮に招待したが断られた。こうして王宮に迎え入れられたシンデレラは王子と幸せに暮らした。

<シナリオ>

ナレーション 「これから始まるのは、むかしむかしのお話です。」

泣きながら

シンデレラ 「私はシンデレラ。不幸な女。いつも義母様たちにいじめられる。なぜかしら。あらあら、あなたはお客さんかしら？何もないところだけどゆっくりして行ってね。」

意地悪三人 「シンデレラ！ シンデレラ！」

シンデレラ 「呼ばれちゃったわね。はいは〜い。今行きますよ！おはようございます。よく眠れましたか？」

ドリゼラ 「いいから、この荷物を棚の上にあげなさいよ！」

シンデレラ 「はい。わかったわ。」

箱を閉じる音

シンデレラ 「おはよう、アナスタシア。」

アナスタシア 「もう、さっさとしてよ、それが終わったら庭の芝刈りよ。他の用もあるからさっさとしてよ！」

シンデレラ 「てめえ、自分でやれ。」

箒ではわきながら

シンデレラ 「おはようございます。義母様。」

義母 「あんた！また私のドレス着てる！もうやめてよ！」

シンデレラ 「いやー！、おやめになって！」

義母 「そんなんじゃいつまでたっても外に出歩くことが出来ないわよ。」

シンデレラ 「うー。そ、そんな…」

戸を叩く音、咳払いをしながら

シンデレラ 「はいはい。」

アナスタシア 「あんたは出ちゃだめ！奥に引っ込んで！はい、どちらさま？」

使いのもの 「王宮から参りました。王様からのお知らせでございます。実は、王子様のため、舞踏会の招待でございます。」

義母 「まあ、すてき。舞踏会のお知らせよ。」

シンデレラ 「これは行くしかないわね！」

ドリゼラ 「あなた、舞踏会に来るの!？」

義姉二人 「絶対来ないでよ！」

シンデレラ 「いやー！」

義母 「ガタガタ言っていないでさっさと馬車を呼びなさい。」

シンデレラ 「すいませーん！」

夕刻

シンデレラ 「義母様、馬車が来ましたよ！」

義母 「じゃあシンデレラ、行ってくるからね。」

シンデレラ 「お気をつけて…」

意地悪三人 「ふっふっふ…」

扉を開ける音

シンデレラ 「なんで私だけ舞踏会に行くことが出来ないのかしら。この世の中何も信じられるものなんてないのね。」

魔法使い 「何も信じられない？それは嘘だよな？夢を信じない人の所へ僕は現れないよ！ほら、涙をふいて！」

シンデレラ 「あなたは…どなた？」

魔法使い 「あなたを見守る魔法使い。さあ杖を使って奇跡を起こすよ！かぼちゃで馬車を、ねずみで馬を、犬を使いのものにそれ！どうだい？」

シンデレラ 「まあ！！あの本当にありがとう。だけど、こんな格好じゃ…」

魔法使い 「なんて汚い格好なんだい。それじゃだめだよ！いいよ、僕に任せて！そ

れ！どうだい？」

シンデレラ 「まあ！なんて素敵なドレスなんでしょう！なんだか夢みたいよ！」

魔法使い 「喜びすぎだよ！でもこの魔法は12時の鐘がなりやむと、魔法が解けて全部もとの姿に戻るんだ、気をつけて！」

シンデレラ 「わかったわ、真夜中までがタイムリミットね。こんな素敵にしてくれて本当にありがとう！んーつま。」

魔法使い 「汚いなあ！おっと大変！舞踏会は待ってくれないんだよ。さ、いったいたった！」

馬車の足音

宮殿内

宮廷音楽と雑踏

王 「お前のために舞踏会を開いてもう13回目だぞ。誰でもいいからそろそろ結婚相手を決めてくれないか。」

王子 「わかってるさ、父さん。」

使いのもの 「んー、王子が気に入るような娘はいないのでしょうか？王子は全く興味を示しておられぬ。ん？あの娘はどここの娘だ？」

王子 「おや？素敵な人がいるじゃないか？どうだい？踊らないか？」

シンデレラ 「え？はい。」

宮廷音楽

ドリゼラ 「ママ、あれ…。」

義母 「何…？もうおしとやかにしないと王子様のお目にとまら…シンデレラ！？」

アナスタシア 「何であいつが踊ってるの！？」

宮廷音楽の流れる中12時の鐘がなる

王子 「そうだ、君の名前を教えてはくれぬか？」

シンデレラ 「まあ、大変！」

王子 「どうした？」

ずぶとい声で

シンデレラ 「12時よ。」

王子 「何だその声は！まだ、12時じゃないか！」

シンデレラ 「ああ、ごめんなさい、12時には帰るとお約束したの。」

王子 「約束…誰との約束なんだい！」

シンデレラ 「あ、鐘が鳴り終わってしまうわ！」

扉を開ける音

シンデレラ 「とても寂しいけれど…さようなら！」

王子 「まって、まってくれ君！ああ、行ってしまった…」

シンデレラ 「あ、靴が、やっぱり間に合わないわ！」

魔法使い 「シンデレラ！早く靴を返しておくれ！実はさ〇えのなんだ！急いで帰らないと怒られちゃうんだよ！さあ早くジェットに乗って！」

鐘の響く音

朝

鳥の囀り

シンデレラ 「んーいい朝ね。昨日のことは夢だったのかしら。」

アナスタシア 「太閤様よ。」

義母 「まあこんな所までようこそ太閤様。娘を紹介いたします。ドリゼラと、そしてアナスタシア。」

義姉二人 「どうも。」

太閤 「そんな紹介したってしょうがないじゃないか。早く靴を履いてください

よ。」

ドリゼラ 「んー！おかしいですわ。今日は足がむくんでいるのかしら。」

アナスタシア 「うう、昨日はぴったりだったのに。靴が縮んでしまったのかしら。」

太閤 「そんなこといったっておいしいじゃないか！足の指だけは入りますが、お二人とも無理のようですね。他に娘はいらっしゃいますか？」

義母 「いいえ、もうおりません。」

太閤 「そうですか、ではこれにて。」

陰でつぶやく

シンデレラ 「靴？まさか私が落としたあの？」

表に現れて

シンデレラ 「あの…こんにちは…。私…靴…履かせてください！」

義母 「シンデレラ…あんた…。」

ドリゼラ 「一家の恥さらしだわ。もう耐えられない！早く戻りなさいよ！」

太閤 「まあまあそう言わないで、まあ試しに履いてみてくださいよ。どうぞ。」

シンデレラ 「ありがとうございます。それでは早速…。あらあ、昨日は間違いなく入りましたのに…。ふん！」

靴の割れる音

シンデレラ 「入ったよな、ピッタリって言え！」

太閤 「いや、んー、少々お待ちください。王子、王子！」

王子 「どうしたんだい？んー、この顔は見覚えがあるぞ。」

シンデレラ 「王子様、またお目にかかれて光栄ですわ、私よ！」

王子 「その声はいとしの君。ぜひ私と一緒にお城で暮らしてほしいぜ。」

義母 「シンデレラが？」

アナスタシア 「王子様に？」

ドリゼラ 「選ばれた!？」

意地悪三人 「男じゃーん！」

ナレーション 「こうしてシンデレラは王子様と再会し、王様の白い目線をよそにお城へ嫁ぐ事になりました。苛めてきた三人は恥ずかしいわけか、街から離れ、ひっそりと暮らしたとか、暮らしていないとか、いずれにしてもお幸せに！」

題名	勘弁してください大佐殿			
脚本	原武彦			
キャスト	城	城崎研人	中	中村祐樹
	先任兵	伊東賢宏	隊員	西田一也
	小隊長	木下頌人	軍曹	小宮裕幸
	通信兵	木下頌人	ナレーション	玉城寿乃
	クレジット	北川祐子		

### <あらすじ>

人類が宇宙へと進出した後、火星開拓計画が始まったころ、異星人の襲撃を受け、火星で戦争が勃発する。ちょうどその頃、ある問題で大佐の怒りをかけた城と中は、兵歴がないにもかかわらず火星へ送られた。到着してすぐに先任兵に喋らず歩けと叱られる。自分たちの行き先がわからない旨を伝えると、先任兵は現在着用しているパワードスーツを使って情報を見ろと指摘する。二人が情報の見方もわからないことを悟ると、溜め息をつきながら渋々説明を始め、その説明が終わるとすぐにどこかへ行ってしまふ。

二人が困っていると一人の隊員が遠くから声をかけて近づいてきた。そこで二人は「第五小隊」の一員であったことを知り、その隊員と共に小隊長の元へ行く。小隊長の元に行くとそこには二人の人物がいた。第十一混成連隊第三大隊隷下の第五小隊長とその副官を務めている軍曹だ。各々の簡単な自己紹介が終わり、小隊の詰所で休んでおくように言われる。詰所は簡易式のテントのようなもので、雨風を防ぐことがやっとなような物だった。仕方なく二人は詰所で休むことにした。

その後、全小隊に招集がかかった。この召集は上層部から「主力部隊を用いた大規模進行作戦」展開についての内容だった。これは異星人との膠着状態を解く打開策である。第五小隊はその橋頭堡を確保するまでの、陽動作戦部隊の一部隊であり明日からこのよう同作戦が実施される。

戦闘知識、経験の無いまま、いきなりの本戦へ繰り出され困惑している二人に隊員が声をかけ、二人に紙を渡す。それが遺書を書く紙であるとわかり、釈然としないまま遺書を書くことになる。

明くる日、朝から第五小隊は拠点近くまで歩いていた。異星人の拠点まで近づいたところで司令部と連絡を取るため、通信機を使用することにしたが、通信状態がよくなく、高台まで行かなければならなかった。そこで城と中を呼び出し、高台まで通信しに行くよう命令した。二人が高台に到着し、通信機を使って司令部と連絡したところ、異星人は北の岩場付近におり、規模は一個小隊程度でそう多くはないということだった。

小隊に戻った二人はすぐにその旨を小隊長に伝えた。それを確認した小隊長は、迫撃砲でその岩場を狙撃。異星人が吹き飛んでいる様子を見て、現状から見て有利だと考えていた小隊長だったが、一個小隊規模だったはずの敵が次々



に現れ、数を増していく。これを見た小隊長は一旦後退を命令する。城と中は小隊長と共に、後退しながら地雷を敷設していくが異星人に狙撃され敷設した箇所を見事に吹き飛ばされる。危険にさらされながらも隊員の援護により後退は成功。

後退し体勢を直した第五小隊は、射撃を開始する。それと同時に地雷を敷設した場所に異星人が到達したため、爆破する。しかし全滅には至らない。

そう考えたその時、突然異星人が同士討ちを始めた。意味は分からないが小隊長はここで一気に攻撃を仕掛けることを決断。残弾が無いことを知り、総員に着剣を命令する。総員が突撃を開始した直後前方から爆発音が聞こえる。爆撃された上空にはVTOLが飛んでいる…。

<シナリオ>

場所 - 第3歩兵大隊拠点

V T O Lのエンジン音、主人公らは機体内にいる。

V T O L着陸、ドアが開く音。

前任兵 「おい、到着したぞ。さっさと降りろ。」

ぞろぞろと兵士が降りていく音。

城 「本当にきちまったなあ。」

中 「うん、きちゃったね。」

砂嵐のような風の音、その後、戦闘機が通り過ぎる音がする。

兵士たちのざわめき

城 「で、おれたちはどこにいけばいんだろうか？」

中 「なんか、データが送られてるらしいけど、この装置使い方がわかんない。」

そこにさっきの前任兵が現れる（足音）

前任兵 「おい、おまえたち何をそこに突っ立てる。さっさと持ち場に移動しろ。」

城 「あ、すみません。行き先がわからないので…」

中 「情報の見方がわからないんです。」

前任兵 「はあ？パワードスーツの使い方もわからないのか！」

城・中 「はあ、すみません。」

前任兵 「兵に支給されてるパワードスーツは簡易量産型ではあるが、音声機能が付いている。やりたいことがあれば、スーツに命令してやればいい。そうすれば、それが実行される。」

城・中 「なるほど。」（はもり）

前任兵 「関心してる場合じゃない。そんなもの訓練課程で習っているだろうが。」

城 「いや、それが自分たちは…」

前任兵「とりあえず、さっさと情報を見て持ち場に移動しろ。いいな！」

どかどかとその場を離れる前任兵

中 「あー、どっか行っちゃったよ…」

城 「うーむ。俺らは訓練も何も兵士ですらないんだが…」

中 「まあ、それをここで言ったところで信じてもらえないだろうけどね」

城 「そもそも、あの大佐ってやつが原因なんだよ。」

中 「まさかね、あんなことになるとはね。」

城・中 溜め息「ハア…」

隊員 「おい、おまえら。もしかして、第5小隊の補充兵か？」

城 「第5小隊？」

中 「補充兵？」

隊員 「おいおい、大丈夫かよ。配属先とかちゃんと見てんだろ？ じゃなきゃ、こんなとこいないわな。 とりあえず、補充兵でここに残ってるのはお前らしかないんだ。俺についてこいよ。」

城 「あの、ちょっと」

中 「あ、あら、先にいっちゃったよ。」

城 「うーむ、とりあえず、行くか」

中 「そうだね。」

3人の足音。

隊員 「小隊長、補充兵のやつら連れてきましたよ。」

小隊長 「おお、すまないな。」

隊員 「いえ、大したことはないです。」

小隊長 「補充兵といっても二人か…。」

軍曹 「状況が状況ですから、致し方ないでしょうな。」

小隊長 「私は、第11混成連隊第3大隊隷下の第5小隊長だ。よろしく頼む。」

軍曹 「私は、小隊長の副官を務めている。階級は軍曹だ。よろしくな。」

城 「私は、城と言います。こちらこそ、よろしくお願ひします。」

中 「自分は中と言います。よろしくお願ひします。」

小隊長 「敬礼すらぎこちないな。緊張しているのか？まあ無理もない。こんな所に飛ばされたんじゃないな。」

城 「いえ、やり方を知らないのです。」

小隊長 「そんなわけないだろ。おまえ、冗談が下手だな。」

城 「いえ、冗談じゃ…」

城のセリフにかぶせるように話す。

小隊長 「まあ、今日は特に仕事もないから、休んでおけ。君、小隊の詰所まで案内してやってくれ。」

隊員 「了解しました。二人ともついてこい。」

速い足音

中 「え、へ、あ、ちょっと待ってください。」

城 「足が速いな、あの人。」

再び、3人の足音。

隊員 「一応、ここが小隊の詰所だ。」

城 「これは…簡易テント？」

隊員 「テントがあるだけマシだと思っとけよ。砂嵐防げるだけで大分、違うんだぞ。」

中 「確かに、この環境だと布一枚で影響ありそうですね。」

ぼそりと呟く

城 「地球とは比べ物にならないな…」

隊員 「とりあえず、お前らはこの辺で今日は休んでおけ、命令があるまでは、下手に

動くなよ。」

城・中 「わかりました。」

場所・小隊詰所 数時間後

小隊長 「みんな、よく聞いてくれ、大隊司令部より命令が通達された。」

(ざわざわする)

隊員 「いよいよ、本番ですか。」

小隊長 「まあ、そうだ。とりあえず、聞いてくれ。」

小隊長、間を取る

小隊長 「我軍は、敵と戦闘状態になってから、膠着状態が続いている。上層部はこの状況を打開すべく、近々、主力部隊を投入した大規模進行作戦を展開するつもりらしい。」

一同 「おお、すごい。」

(がやがや) (ざわざわ)

小隊長 「そこで、進行部隊の橋頭堡を確保するまでの間、局地的に陽動作戦を行うことが決まった。我々も、陽動作戦部隊の一部隊となっている。明日より、陽動作戦を実施する。各員、準備をしておけ、以上だ。」

ざわざわと解散する隊員たち

城 「いきなり、戦闘かよ…」

中 「来て一日くらいしか経ってないのに…」

隊員 「おい、新人二人。」

城 「はい、なんでしょうか？」

隊員 「お前らも書いとけ、異動してきたばかりでまだ用意できてないだろ？」

城 「紙？」

中 「手紙みたいだね」

城 「これは？」

隊員 「遺書だよ。いつ死ぬかわからないからな。書けるうちに書いておくんだな。」

城 「え…」

隊員 「それじゃ、明日に向けてしっかり休んでおけよ。」

隊員 1 が遠のく。

城 「なんか…すごいな…」

中 「縁起が悪いような…」

城 「まあ…とりあえず、書いておくか…」

中 「うむ」

場所・前線 翌日

ざっ、ざっと小隊の行軍する音。

中 「うはあ…しんどい・・・」

城 「早朝から無理やり起こされて、出撃とか…ありえんやろ。」

隊員 「おい、しっかり歩け！火星の重力は地球の1/3だぞ！！おまけにパワードスーツのおかげで動くのも楽なはずだ。」

中 「そんなこと、言われましても…」

城 「地球じゃこんな物持ったことはないですし…」

隊員 「あまっちょろい」

行軍中、兵士たちの足音

軍曹 「小隊長、このあたりが敵の拠点と思われる場所なのですが・・・」

小隊長 「気配がないな。途中も何もなかったし。」

軍曹 「あまりいい感じはしませんな・・・」

小隊長 「そうだな。司令部と通信して周辺の情報を貰おう。」

軍曹 「はい…しかし、ここは少しばかり通信状態がよくないようです。少し高い位置  
にいけばなんとかなりそうですが。」

小隊長 「あそこに丘があるな。そこで通信させよう。おい、城・中」

城 「为什么呢？」

中 「呼びましたか？」

小隊長 「ここは通信状況が悪いから、あの丘の上で司令部と連絡を取ってくれ。」

城 「あの丘までですか…」

風の音

中 「結構、距離ありますね。」

小隊長 「いいから、早く行ってこい。他の隊員は見張りか休憩をさせている。今、手が  
空いてるのはお前たちしかいないんだ。」

城 「ですけど、もし、途中で敵が出てきたらどうするんですか？」

小隊長 「援護するから安心しろ。とりあえず、さっさと行け。」

城 「・・・。わかりました。行こう、中。」

中 「あ、うん。」

二人の走る音

息を切らしながら

城 「はあはあ、結構距離あったな。」

中 「なんか、部隊と結構離れてるし、危ない気がする…」

城 「すぐに通信を終わらせて部隊に戻ろう。」

中 「そうだね。なんかちょっと不気味だ。」

城 「あ、もしもし、聞こえますか？」

無線のノイズ音がする

通信兵 「こちら大隊司令部。どこの部隊だ？」

城 「えー、こちらは、第5小隊です。えー、私たちのいる地点に敵が居るかどうか

情報をください。」

通信兵 「座標を受信する。少し待ってくれ。」

城 「わかりました。」

少しの間が空く

通信兵 「確認した。その一帯は敵の出現率が大きいけど、現在は確認できない。」

城 「そうですか。わかりました。」

(レーダ反応音)

通信兵 「いや、待て！ 敵の反応が出た！」

城 「え？ ちょっと、本当ですか？」

通信兵 「状況を確認した。敵は一個小隊規模だ。位置は…北のほうだな。そこからそう離れていない。」

城 「北？ 200mか300mくらい先ですか？ 岩がごつごつありますね。」

通信兵 「恐らくその地点だろう。後は、そちらで確認してくれ。以上だ」

ブツツと無線が切れる

城 「通信切れたよ・・・」

中 「北のほうだって？ 何も気配は無いようだけど？」

城 「うーん。一応、情報は貰ったし、小隊に戻るか。」

小隊へと向かう二人

二人の足音、風

小隊長 「なるほど、敵はあの岩場あたりか。」

城 「はい、もらった情報だとそうでした。」

軍曹 「なんでしょうか？ 待ち伏せでもしているのでしょうか？」

小隊長 「どうだろうな。かまわん、こちらから先制攻撃をかければいい。迫撃砲であの岩場を撃て。」



迫撃砲の発射音

着弾音（かなり遠く）

小隊長 「おお、敵が吹き飛んでるな。」

軍曹 「しかし、今のでこちらの位置がばれましたね。」

小隊長 「問題ない、小隊規模なら現状からして、こっちが有利…だ…」

城 「どうかしました？隊長？」

小隊長 「嘘だろ。あれ…？城、敵の情報は間違いなく小隊規模だったんだよな？」

城 「はい、間違いありません。」

小隊長 「だったら、あれは何だよ…」

皆、双眼鏡の機能をONにする。

軍曹 「え？…」

城 「何なんだ？」

中 「なんか、わんさか出てきてますね。」

小隊長 「ぐんちょう！ああ軍曹！直ちに救援要請を！」

方言が出つつ、

軍曹 「小隊長ここでは通信できません！通信状況の良いところでないと！」

小隊長 「だったら、あの丘まで…ってそれじゃまずいな。全員後退しろ！」

城 「とりあえず、逃げろって意味なのか？」

中 「みただね。なんかやばそうだよ。とりあえず、皆についてこう！」

小隊長 「あー、お前ら！」

城 「はい？」

中 「え、なんでしょう？」

小隊長 「ここに地雷を敷設していけ！工兵が一式そこにおいていってるから！」

城 「そんなことしてたら、敵が来ますよ！」

小隊長 「時間稼ぎのためだよ！ えーい、こんなことしてる間にも敵が来るぞ！」

中 「というか、やり方とかわかんないんですが…」

小隊長 「あー、他の奴を呼び止めるんだった…。わかった。俺も手伝うから」

城 「お願いします。」

カチカチと準備する音

軍曹 「小隊長！ 何してるんですか！」

小隊長 「地雷を敷設してるんだよ！」

軍曹 「クレイモアかC4を設置すればよかったのでは？」

小隊長 「あ・・・、でも持ってる工兵はさっさと逃げたし。とりあえず、軍曹も手伝ってくれ！ 時間がやばい！」

軍曹 「わかりました。」

カチカチと準備する音

城 「これで最後です！」

小隊長 「よし！ そうか、だったら、さっさと後退するぞ！」

中 「敵って足速いですね。あの丘のあたりまでに来てますよ。」

小隊長 「丘のところで、俺たち、敵の射程圏内にいるぞ。まずい急げ！」

無誘導弾のミサイルが飛んでくる。

4人は走り出す

中 「わっ、危ない！」

小隊長 「敵のミサイルが熱探知式じゃなくて、無誘導弾で助かる・・・」

城 「というか、地雷を埋めた場所にミサイルが命中しているようですが？」

爆発音

小隊長 「地雷原が見事に吹き飛んだな。あいつら狙ってるのか？」

中 「とりあえず、今は、逃げるのに専念しましょう！」

小隊長 「そうだな。」

後ろのほうから敵の呻き声

方言が出つつ、

軍曹 「まずい、徐々に追いつかれてるようです。」

迫撃砲の着弾音が

隊員 「隊長！こっちこっち！」

小隊長 「おお、あいつらの援護か」

軍曹 「どうやら、短時間で穴を掘って、簡単な塹壕を作ったようですね。」

小隊長 「以外に気の利く連中だな」

塹壕に飛び込む音。

城 「ふう・・・なんとか逃げ切れた」

隊員 「小隊長、無事でしたか？」

小隊長 「ああ、援護ご苦労だった。すぐに機関銃を使って奴らを一掃しろ。」機関銃の音

小隊長 「全員、射撃を開始しろ。生き残りたいなら、全滅させるんだ！」

各所で銃撃音。

城 「えっと、肩に構えて引き金を引けば・・・って撃てないな・・・」

中 「あれだ、お決まりのパターンで、安全装置が外れてないんだ。」

城 「そうか、ってもどれが安全装置なんだ？」

中 「とりあえず、安全って文字があるんじゃないかな？」

城 「安全・・・、SAFEって書いてるな。このレバーを切り替えて引き金を引けば・・・」

3連射の音

城 「おお・・・反動が結構すごいが、撃てたぞ。でも、連射されなかったな。」

中 「3回くらいしか音が聞こえなかったね」

城 「まあ、いいや。出るならこれでとりあえずやるか。後で取扱説明書、読めばいい

いしね。」

中 「うっへー！あの分厚いやつ！？」

城 「うん。」

銃撃戦がしばらく続く

小隊長 「だめだ！敵の数が多すぎる。このままだとこっちの残弾がなくなるぞ！」

軍曹 「司令部に応援を要請してますが、渋ってますね…」

小隊長 「くそ、このままじゃまずい、後退するぞ！」

隊員 「少しばかり先に爆撃でできた穴があります。そこを陣地にしましょう！」

小隊長 「そうだな。全員、その穴まで後退しろ。」

軍曹 「各分隊は交互に援護射撃を行い。互いの後退をカバーしろ！」

小隊長 「工兵！この塹壕に爆薬を仕込んで行け。敵がここを通過したと同時に爆破しろ！」

隊員 「おい、新米！しっかり狙え！弾がもったいないだろう！」

城 「そんなこと言われても、俺ら銃とか扱ったことないんですよ！」

隊員 「それでも、照準合わせていけば、大体あたるだろうが！」

中 「無茶な・・・」

城 「爆撃の穴ってのが見えてきたぞ。」

小隊長 「引き続き、分隊ごとに援護しつつ穴に入れ。」

穴に滑り込む音

軍曹 「全員、後退に成功しました。」

小隊長 「よし、全員、攻撃を再開しろ。」

再び、銃撃音

軍曹 「敵、爆破ポイントに到達！」

小隊長 「そうか！爆破しろ！」

爆発音と異星人の鳴き声

城 「敵が一気に吹っ飛んだぞ！」

中 「いや、飛んだのは一部だけみたい……」

更に、聞こえてくる異星人の呻き声

小隊長 「あれだけの火力を使っても全滅させられないのか！」

軍曹 「どれだけの兵力が奴らにはあるのでしょうか……」

小隊長 「言っても始まらない。救援があるまで撃ち続けるんだ！」

中 「そんな……」

城 「絶望的過ぎるだろう……」

ノイズ音が聞こえてくる。

小隊長 「ん？このノイズは……」

軍曹 「これは太陽風か！」

小隊長 「全員、伏せろ！」

城 「え？一体何が？」

中 「なんか、伏せたほうが良さそうだよ。」

城 「うむ。」

ノイズ音が通過する。

中 「う、うわ。パワードスーツのモニター画面が壊れた！」

方言出つつ、

軍曹 「安心しろ。それは一時的なものだ。すぐに元に戻る。」

中 「ん、あ。本当だ。」

城 「今のは、一体何が起きたのですか？」

軍曹 「あれは太陽風だ。稀に発生する現象でな、電子機器を故障させる原因なんだ。

我軍の使用する電子機器は、対策処置が取られているから気にしなくて良い。

まあ、直に受けるのもあまりいい影響を与えないからな。発生する時は大体、

退避するようにしているのだよ。」

中 「ふむふむ、いろいろと面倒なことがあるんですね。」

軍曹 「本当にわかっているのか？」

城 「あ、ところで、敵はどうなったんですか？」

軍曹 「あ」

小隊長 「問題はないようだぞ。」

城 「へ？」

小隊長 「あいつら、同士討ちを始めてる。」

遠くで銃撃音や異星人の呻き声

中 「本当だ。」

城 「どうしたんでしょう？」

小隊長 「さあな、しかし、こちらには好都合だ。一気に攻撃をかけるぞ。」

小隊長 「迫撃砲の弾はあるか！」

隊員 「弾薬ゼロです！」

小隊長 「機関銃は！」

隊員 「弾倉が一つだけあります。」

小隊長 「手榴弾とか、爆弾一式は？」

隊員 「隊員によってまちまちですが、ほとんどゼロです。」

軍曹 「小隊長…。我小隊は、戦力がほとんど残っておりません。」

ぼそりと呟く

城 「どうするんだ…」

小隊長 「総員、着剣！銃剣突撃を敢行する。機関銃兵は最後の弾倉を使い終わり次第、  
参加せよ。」

ガチャガチャと銃剣を装着する隊員ら

中 「何が始まったの？」

城 「明らかに、嫌な感じがするけどね…」

隊員 「おい、二人ともちゃんと銃剣を着けろ。突撃の意味がないだろう。」

城・中 「エー…」

小隊長 「総員、突撃用意！」

銃の先が揃う音。

異星人の声が絶えず聞こえる。(ただし、混乱中)

小隊長 「突撃！」

一同 「うおおおお！」

後ろで機関銃の音

軍曹 「小隊長、敵がこちらに気づいたようですが？」

小隊長 「構わん！突撃しろ！」

走りながらぼやく

城・中 「あー、これはもうだめだ。死んだわー」

駆け足の音

小隊長 「うおー！」

突然、前方で爆発音

小隊長 「爆撃だと？総員、止まれー！」

ばらばらに走るのをやめる隊員ら

上空でVTOLのエンジン音